

令和6年度 静岡済生会看護専門学校 学校評価書

4:達成 3:概ね達成 2:達成には不十分 1:達成していない

	自己評価:3	学校関係者評価:4
I 学校運営	<ul style="list-style-type: none"> <li>職員は組織目標・役割を意識し、各自の業務目標を設定して業務を遂行している。しかし、その内容をチームでの目標達成や各自の業務に繋がっていない事が課題である。タイムリーに情報共有を図り、目標達成の行動がとれるように努力していきたい。</li> <li>新たな職員の多様な意見をふまえて、業務のあり方を見直す機会にもなっている。更に、新人のサポートを次年度に繋げ成長を支えていきたい。</li> <li>教員不足により、専門性を活かした教育が十分でない領域は、自ら研修を取り入れ能力開発を継続している。また、職員の欠勤時には、皆で気持ちよく助け合う協力体制が常にある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>教員不足は大きな問題であるが、互いに協力しチームとして力を発揮する取組ができてい</li> <li>新任教員の意見を取り入れた業務の見直しや、専門性を活かした教育ができるよう研修参加の後押しなどの取組も評価したい。</li> </ul>
II 教育理念・教育目標・教育課程・教育活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>新カリキュラムで対応した学生が卒業していく中、改正趣旨を踏まえた教科・内容を学生がどのように学び・成長しているのか、カリキュラム運用会議を継続している。その中で授業内容と時間数、進捗や教育目標・ディプロマポリシーが学生にとっての指針になっているのか、課題であり検討を進めている。</li> <li>臨地実習は、施設・実習指導者と連携をとり、問題点に対しては早期に改善を図っている。更に実習指導者の協力も得て、学生の効果的な学びに繋げていく授業への参加を計画している。</li> <li>インシデント・アクシデント、情報管理に対する学生の意識を高めるために、説明する機会を増やし、SNSの取り扱い等の注意を常に持つ機会を強化した。また、学生がインシデント・アクシデントの分析が速やかにでき、対策に繋がるよう対応を見直した。</li> <li>教員不足の中、教員一人ひとりの育成を大事にし、専門性と実践力が高められる研修を継続して取り入れていきたい。教員の共通認識が必要な研修は全員で学んだ。新人教員にはサポート教員をつけ、不安・疑問点に対して直ぐに解決が図るよう意識した。次年度へ丁寧に繋げていきたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>カリキュラム運用会議を開催し、学生が学んでいるかカリキュラム評価の視点で継続的に分析している。</li> <li>施設・実習指導者との連携がよく、実習指導者も一緒に働く看護師を育てたいという思いで指導できている。</li> <li>看護教育は教員が要であるため、教員が学生とともに学べるようなゆとりを持てる環境づくりや体制づくりに努めてほしい。</li> </ul>
III 就職・卒業	<ul style="list-style-type: none"> <li>国家試験の合格が100%を継続できているが、学生の学びや対策に困難性が年々増している。1年次から計画的に進め、学びの状況の評価しながら学習方法を工夫しているが、教員・学生間で十分に理解・周知できていない状況もあった。国家試験対策の経験がない教員も増えているため、外部講師とも連携をとり、改めて国家試験対策の検討が必要である。また、合格を目指す事と共に専門職業人としての人間性が育まれる関わりも意識していきたい。</li> <li>各学年、面接を計画的に実施し学習状況の確認、就職・進路の相談を受けている。また、就職については、業者を活用し様々な病院を知り、希望病院を選択できるよう説明会の参加を促している。</li> <li>ホームカミングディの参加はリフレッシュができ、就業意欲に繋げることができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学校、学生などの努力により、国家試験合格100%を継続している。</li> <li>ホームカミングディも継続してほしい。</li> </ul>
IV 学生生活支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>給付金・奨学金に関して、学生に情報提供するとともに、速やかな手続きに努めている。また、授業料の滞納2名には、分納を認めて対応しているが、納入に困難さが継続している。</li> <li>スクールカウンセリングの実施が延べ6名であった。ストレスチェックの実施やカウンセラー通信の発行は、各自の心理状況の把握と対応に活用ができてい</li> <li>学生からの相談事に対して教員は、早期に対応して解決の糸口を見つけている。丁寧な対応と共に社会人としての学生職員間の距離の取り方も意識していきたい。</li> <li>合理的配慮の研修を職員全員で受け、共通認識を持った上で対応要領を作成した。</li> <li>ワクチン接種の推奨、健康診断の結果を活用して学生の健康管理に努めている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>経済的、身体的、精神的、いろいろな方向性からサポートができてい</li> <li>学生の時期から学校の先輩たちとのつながりを持てる機会を設けるなど就職先になじめる工夫をしてほしい。</li> </ul>

V 経営・管理・財政	<b>自己評価:3</b>	<b>学校関係者評価:4</b>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・施設・設備の老朽化に伴い、教育効果や学習への影響を意識して予算執行に努めているが、早急に今後の将来構想を見据えた財源管理が必要である。</li> <li>・職員間・学生間の尊重した対話のとれる事を目指した研修に全教員で参加し、関係づくりの意識を高めている。</li> <li>・玄関に監視カメラを設置し来校者の確認が可能になり、校内の安全確保に繋がっている。</li> <li>・学生からの学校運営評価では、老朽化した設備、改善された教育環境、学校の関わりなどの意見があった。その中で実習先の看護職・医師の指導や対応に温かみがあるという意見も多かった。教育環境の改善の必要があるものは、早期に対応していきたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・老朽化は否めないが、監視カメラの設置や図書室の整備等の工夫はできている。</li> <li>・将来的には病院と学校で今後の学校の在り方について検討を進めてほしい。</li> </ul>
VI 教育環境	<b>自己評価:3</b>	<b>学校関係者評価:4</b>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教員・学生はタブレット・学習支援ソフトの活用に慣れ、授業・連絡等に活かしているが、各自の更なる活用方法の習得と効果的な学ばせ方・学び方の検討が必要である。</li> <li>・各教室の映像機器の活用頻度が高いため、速やかに不具合を把握し、修理・買い替えに努めている。</li> <li>・利活用がされていない和室の整備をし、福利厚生を意識した。施設の老朽化に対しては、整理整頓、清掃を基本に学習環境の整備を学生と共に継続していきたい。</li> <li>・長年の課題であるレファレンスサービスを始動させることができるように、図書記号の正確化を図り、看護学校として必要な蔵書の新陳代謝を図ることが可能になるように整備している。また、教員の図書・文献活用の理解も深められるように教務事務を中心に進めている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教員も学生も効果的にタブレットや学習支援ソフトの活用を進めている。図書の整備を進めていることも評価する。</li> </ul>
VII 広報・地域との連携	<b>自己評価:3</b>	<b>学校関係者評価:4</b>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入学生40名は確保ができたが、受験生の減少が年々進み、定員と質の確保の厳しさが増している。今後の本校の在り方も踏まえ、魅力を発信していきたい。</li> <li>・学校祭の広報や関連施設へのボランティア活動を進めることができた。外部へのボランティア活動に関心を持つ学生も多く、意欲的に参加している。</li> <li>・インスタグラムの頻度を上げ、日々の学校の様子が地域に届けられるように意識している。高校生からは、インスタグラムを見たという声が増え、受験生の広報に繋がっていると感じる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・少子化や大学志向がある中、高校訪問や学校説明会への参加などにより入学生を40人確保している。</li> <li>・ボランティアなど施設や地域での活動を広げるために、今後もよい環境づくりに努めてほしい。</li> </ul>

<総 評>

自己評価の内容から静岡済生会看護専門学校は、教育の質の向上を目指してやれることは全て過不足なくやっていると  
思う。一方、将来的には、専門学校としてどのように看護師の養成を担っていくのか、将来構想をどう持てばよいのかなど、  
大きなところで考えていかなければならない。教員不足もそこに付随している問題であり、解決していかなければならない課  
題である。

教員の負担軽減を図り、教育にやりがいを感じて働き続けてくれる人をどう育成していくのか考える必要がある。技術革新  
や医療が変化する中、教員の知識や経験だけでは看護教育は成り立たない。教員も学生と一緒に学び続けることが必要で  
あり、そのためには教員にもゆとりが必要である。教育の質を保証するのは教員の力であると思うので、教員の心身の健康  
の保持はもちろんのこと、教員が心にゆとりがもてるような働き方改革に取り組んでいただきたい。

学校関係者評価委員

委員長:渡邊 暢子(元静岡市立静岡看護専門学校副校長)

委員:櫻井 郁子 (静岡県看護協会常務理事)

委員:川口 光代(静岡済生会総合病院 教育担当 )

委員:小早川 裕生 (卒業生)